

一般演題(口演)13

育児・子育て支援

座長：鈴木美枝子（玉川大学 教育学部 乳幼児発達学科）
ポーター倫子（北陸学院大学 教育学部 幼児教育学科）

O13-076

在籍保育所における親子療育教室の意義—第7報—発達の気になる子どもをもつ親への子育て支援 子育てファイルふくいっ子の活用

橋本かほる¹⁾、竹内 恵子²⁾、津田 明美³⁾

¹⁾京都先端科学大学 健康医療学部 言語聴覚学科、

²⁾福井大学 教育学部、³⁾福井県こども療育センター

【はじめに】「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」は、健やか健診（第2次）の重点課題の一つとしてあげられている。福井市では、2012年より特別な配慮が必要な子どもへの支援を強化する柱の一つとして、公立保育園における親子療育教室（教室）の研究を継続している。対象となる発達の気になる子どもについて、行動観察、発達検査、と並行し福井県が「早期発見・早期支援・途切れない支援」を目的とした支援ツール「子育てファイルふくいっ子」（ふくいっ子ファイル）を用い包括的なアセスメントを実施している。教室に参加する親はなんらかの育てにくさを感じており、親の内面や子どもの発達特徴への理解が親支援に重要である。今回は、発達の気になる子どもをもつ親支援におけるふくいっ子ファイルの活用について報告する。

【目的と方法】教室参加児に対し、担任保育士はふくいっ子ファイルとKIDS乳幼児発達スケール（KIDS）を実施し、親には日本版育児ストレスインデックス（PSI）を実施した。ふくいっ子ファイルの結果から、発達の気になる子どもの特徴について分析した。さらに、PSIの結果のうち子どもに対するストレス値が高い親について、ふくいっ子ファイルとの関係を分析した。【結果】対象児は21名（男児14名、女児7名）。年齢は37～45ヵ月（中央値46ヵ月）であった。担任保育士による対象児のKIDS発達指数（DQ）は36～93（平均71）であった。ふくいっ子ファイル10項目のうち、「衝動性」については、ややあてはまる（評定3）・あてはまる（評定4）に該当した児は11名で全体の52%、半数以上であった。ついで、「不注意」10名（全体の48%）、「多動性」9名（全体の43%）と続いた。一方で「行動・情動（2）」については評定3以上に該当した児はいなかった。PSIで子どもに対する育児ストレス値が高かった親は3名あり、その子ども3名のうち2名については「衝動性」「不注意」「多動性」の全項目が高評定であった。PSIの子どもに対するストレス項目「子どもの機嫌の悪さ」について高ストレス値の親（10名）と、低ストレス値の親（11名）の間に、ふくいっ子ファイルの各項目間の平均値の差はなかった。集団保育での衝動性や多動、不注意は保育を担う保育士のみならず、親にとっても育児ストレスの一要因と考えられ、保育上の大変なストレスと考えられる。

O13-077

行動変容に頼らない予防実践のための家庭訪問マニュアル作成

大野美喜子¹⁾、本田千可子²⁾、吉川 優子¹⁾、三田 恵子¹⁾

¹⁾Safe Kids Japan、

²⁾東京大学大学院 医学系研究科 健康科学・看護学専攻

【目的】現在、窓・ベランダからの転落を予防するための有効な対策として、保護者に、子どもが一人でベランダに出たり窓を開けたりできないように補助錠の設置を強く求めている。しかし、ほとんどの家庭は設置していない。この転落予防対策のみならず、家庭内の事故対策実施に対する大きな課題の1つは、現状、対策の実施は保護者だけに任されており、それが、保護者の知識レベルや対策実施の意欲などに依存し、その結果として対策は実施されないという構造になっている点にある。本稿では、保護者の行動変容に頼らない新しい予防アプローチとして、家庭訪問を通じた予防対策の実践を提案し、訪問前、訪問時、訪問後の確認事項や進め方を整理した家庭訪問マニュアルを作成したので報告する。【方法】本研究では、東京大学大学院医学系研究科および一般社団法人いんふあんとroomさくらんぼと連携し、赤ちゃん訪問など普段から実際の家庭訪問を実施している看護職によるグループインタビューと実際の家庭訪問を繰り返しながら事故予防対策実施のための家庭訪問マニュアルを作成した。具体的には、Safe Kids Japanがたたき台となるマニュアルを作成したあと、実際の対面とオンラインの家庭訪問を実施しながら、専門家のコメントをもとにマニュアルの修正を繰り返し完成させた。家庭訪問では、家庭内の事故に関するミニレクチャーを実施したあと、補助錠設置が必要な窓に案内してもらい、家庭訪問実施者が補助錠を設置した。今回、補助錠は3種類準備し、保護者が希望したタイプの補助錠を設置した。【結果】3回のグループインタビューおよび対面による家庭訪問を12件、オンラインによる家庭訪問を8件の計20件の訪問を実施した。今回、家庭訪問を受けた保護者からは、家庭訪問が、予防対策の重要性を改めて考える機会になったという意見が多く聞かれた。また家庭訪問実施者からは、家庭ごとに間取りや窓の種類など環境や状況が大きく異なり、実際に現場を見て、第三者（保健師など専門家）と一緒に事故予防に取り組むことの重要性を改めて実感したといった意見があった。【結論】本研究で作成したマニュアルは、Safe Kids Japanのホームページで公開している。今回のマニュアルは補助錠設置に特化したものであるが、今後、他の対策にも対応できるように拡張する予定である。また、この家庭訪問の保護者の対策実施に対する負担軽減効果も検証していきたい。